

20 自立訓練部との連携を行ったロービジョン症例の報告

リハビリテーション部ロービジョン訓練 三輪まり枝 山田明子 西脇友紀 仲泊聡
自立訓練部 機能訓練課 河原佐和子 井口健司 鈴木克子

<はじめに>

センター中期目標を鑑み、自立支援局と病院の部門横断的取り組みが求められているなかで、自立訓練部と病院リハビリテーション部ロービジョン訓練の連携により視機能評価ならびに訓練を行った1症例について報告する。

<症例>

症例は、糖尿病網膜症、視神経萎縮の50歳代の男性である。眼科学的所見は矯正視力が右眼(0.05)、左眼(手動弁)であり、視野は、右眼に中心暗点を認め、左眼では周辺に一部残るのみであった。平成22年3月よりパソコン訓練を希望され、自立訓練部にて週に3~4日の訓練を実施した。本症例からの遮光眼鏡の選定希望に基づき、自立訓練部よりロービジョン訓練に評価依頼があり、遮光眼鏡の評価選定を行い、貸し出しによる装用試行を実施した。自立訓練部での歩行訓練およびパソコン訓練等を通し、貸し出された遮光眼鏡の日常生活上における有効性が評価された。眼科・ロービジョン訓練での評価会議には自立訓練部の担当者二名が会議に参加し、遮光眼鏡の効果等について討議した。その会議において右眼に中心暗点を有することから、偏心視獲得訓練の必要性が提案され、偏心視獲得訓練が実施された。その訓練には自立訓練部の担当者も同席し、ロービジョン訓練スタッフとの情報の共有化が図られた。

<結果>

自立訓練部において日常生活上の遮光眼鏡の効果を確認したところ、東海光学社 CCP-SC (薄い緑色) で日常における差明を軽減することが判明し、視覚障害者用補装具として申請を行った。また、自立訓練部と共同で実施した偏心視獲得訓練の結果、訓練前の右眼矯正視力(0.05)が、訓練後には(0.15)と改善し、有効な偏心視が獲得できたことが確認された。

<結論>

視覚障害者に対するロービジョンケアにおいては、医学的評価に基づいた視機能の把握および視覚補助具の選定が必要不可欠である。また、選定された視覚補助具の日常生活上での有効性を、自立訓練部での訓練や生活を通して判断することも重要である。ロービジョン訓練および自立訓練部のスタッフの両者が、患者(利用者)に対して、それぞれの専門において異なった視点での関わりを持つことは患者(利用者)の見やすい環境を整えるために理想的な支援形態であると考えられる。今後もこのような有意義な部門横断的取り組みを継続していきたい。